

19～20世紀の中国語教育史を研究するための資料

— 鱒澤彰夫氏寄贈図書の日録編纂作業とその特徴

氷 野 善 寛

Cataloguing and highlighting the research materials for the history of Chinese-language education in Japan in the library donated by MASUZAWA Akio

HINO Yoshihiro

This paper describes the process of cataloging some 10,000 volumes of primary source materials on Chinese-language education and related literature donated to the Center for the Study of Asian Cultures in 2015 by Masuzawa Akio, a specialist in the history of Chinese-language education in Japan. It also introduces some of the more important materials contained in this collection. These include precious sources for the study of Meiji-era Chinese-language education and research that are unavailable elsewhere, such as Fukuzawa Susumu's *Pekin kanwa zensho*, a compendium of the Beijing dialect of Mandarin Chinese; the Jiujiang Shuhui edition of *Kuan Hua Chih Nan*, a primer of Mandarin; Odagiri Masunosuke's personal copy of *Ajia gengo shu*, a Beijing Mandarin textbook; and an original rubbing of the inscription on Kawakami Chikayoshi's gravestone. Nor is the collection restricted to Chinese-language education; it also has ample source materials on education in other languages, especially pre-war Japanese-language education.

キーワード：中国語教育史 (History of Chinese Education)、中国語・中国語学
(Chinese)

1 はじめに

2014年12月に日本大学工学部（福島県郡山市）の鱒澤彰夫氏の研究室を訪ねた。目的は氏が収集した中国語教育史関係の資料を拝見させていただくことであった。鱒澤彰夫氏は中国語教育史の研究者で、早稲田大学大学院文学研究科で学んだ後、明治期以降の中国語教育史に関する論文を数多く執筆している。私が研究室を訪問した当時は2015年3月に退職を控えておられる時期で、研究室は足場のないほど所狭しと資料が入った段ボールが置かれていた。その際、氏が研究生活で収集した中国語教育史に関する原資料から関連書籍、そして自身の研究の蓄積である研究ノート類などの全ての資料について寄贈先を探しておられるということを知った。そこでこれらの資料の寄贈先について、関西大学の内田慶市図書館長と相談の上、アジア文化研究センターにご寄贈いただくことになった。かくして2015年2月から7月にかけて段階的に関西大学アジア文化研究センターに氏が収集した資料が届いた。10000冊を超える書籍に加え、写真や研究ノート、音声資料など多岐にわたる想像以上に大規模なコレクションであることが判明したのは本稿を執筆しているほんの数か月前のことである。

本稿ではこれら寄贈資料の整理状況と寄贈いただいた書籍の特徴について紹介したい。また寄贈書の中には中国語教育史の研究者である六角恒広氏の旧蔵の書籍も何点かあり、鱒澤彰夫氏から六角氏の旧蔵書に関する情報も得られたのであわせて紹介する。

2 六角恒広氏の旧蔵書について

日本の中国語教育史の研究者である六角恒広氏の蔵書は現在どこにあるのか、六角氏が亡くなられて以来、長らく不明となっている。六角氏が編纂した『中国語関係書書目』、また数多くの教本を影印出版した『中国語教本類集成』などは膨大な量の原資料がなければ決して成し得ない成果で、六角氏の蔵書が現在どこにあるか個人的にずっと気になっていた。しかし六角氏が長年在職した早稲田大学にも他の機関にも彼が収集したと思われる書籍は所蔵されていない。この点について鱒澤氏からいくつかのご指摘をいただくとともに、今回寄贈いただいた書籍の中には六角氏が所蔵していたものが数冊入っていた。その一つが『岐先生著中国話全五十章』という会話書の写本である。六角氏は早稲田大学退職後、教本類を书写していたそうで、その写本の1冊が同書である。この写本は宮島大八の写した『岐先生著中国話全五十章』という会話書をさらに写したものである。この種の六角氏の手による写本類は古本市場に出回っているようで、いずれの写本もコピーからではなく現物から直に写した可能性が高いということであ

った。今回の寄贈書の中にあつた写本も原本は当時六角氏の元に所蔵されていた可能性が高い¹⁾と鱒澤氏は語っているが、現在ではどこに所蔵されているか不明となっている。また手元に所蔵していた資料以外にも早稲田大学図書館が所蔵している書籍の書写も行っていたそうである。そのためこの種の六角氏による写本類を見つけることができれば、そこから氏がどういったものを所蔵していたことを知る事が出来ると考えられる。そして肝心の六角先生の蔵書がどこにいったかという、結論から言えばすでにまとまった形では存在しないということであった。早稲田大学にも残らず、またいずれの機関にも公蔵されず、写本類はどこかの個人蔵となった可能性が高く、また刊本類は琳瑯閣書店や、山本書店といった古書店を中心に古本市場に流れ全国に雲散霧消したようである。鱒澤氏によると六角氏の旧蔵書については見分け方があるようで、そういった事情を知った氏はそれらの本も注意して買い集めていたのである。今回寄贈された書籍の中にも『清語ト時文』『華語跬歩稿本』『善隣同窓会誌』といったものがあるが、これらはいずれも六角氏の旧蔵書であると考えられるようである。

3 鱒澤氏が収集した書籍

話を鱒澤氏の寄贈書に戻したい。2015年2月より開始した書籍の整理と目録編集作業は、この文章を書いている2015年10月時点で継続中であり、まだその正確な数や全体像については完全に把握できていない。そのためここではその概要を述べるにとどめる。

寄贈書は概算ではあるが合計で10000冊程度になる。内訳としては、1950年以前に刊行された日本人を対象とした中国語教材が約1500冊、この1500冊は会話書・文法書・辞書などの原資料で、中国の方言学習用の教本も含まれる。中国語以外の外国語教材では英語・フランス語・ドイツ語に関する資料が多く、それ以外に韓国語やロシア語、東南アジアの諸言語を中心に2000冊程度ある。また中国人を対象とした日本語学習に関する教本もあり、鱒澤氏が中国語学習だけに捉われず多角的な視野で教本類を集められてたことが分かる。また1950年以降の教本についても1000冊程度が確認されている。教本類以外には中国語教育史に関わるものとして言語学、日本漢学、文学研究、中国研究、学校史、企業史、名簿、アルバムなどがある。学校史や名簿などを収集しているのは、明治から昭和初期にかけてどういった教育機関で中国語教育が行われ、またどういった学生や教員が在籍していたのかなど人間関係を把握するために集められたと考えられる。中国文学関連書籍としては民国期のものが中心となり『晨光文学叢書』などが

1) 波多野太郎編『中国語学資料叢刊』第3巻に収録されている「17. 中国話」が宮島大八の手による写本であると考えられる。

ある。また中文書は1500冊程度あり、中国言語学関係や民国期の国語教育に関する資料や教材が数多くある。洋書類も充実しており、『語言自邇集』の初版、2版、3版のセットに加え、1840年に刊行された『意拾諭言』、1923年に印刷された鄺其照の『華英字典集成』など19世紀後半の官話関連書籍を中心に100冊程度ある。さらに雑誌類が非常に充実しており、1950年以前に出版された日本人の中国語学習者向けの雑誌を中心に1500冊程度所蔵されている。欠号部分についても、マイクロ資料やコピーなどが補われており、こういった複写資料についても一括してご寄贈いただいた。特に中国語教育関連の当時の雑誌は所蔵している機関も非常に少ないが東亜同文書院が刊行した『華語月刊²⁾』や善鄰社『月刊善鄰』など希少な雑誌も数多く揃った状態である。また和漢書についても500冊程度あり、中には『毛聲山評三國志』といったものもある。書籍以外には鱗澤氏の研究ノートやメモ類、写真や学校のアルバム、地図や観光案内、教本関係のコピーといったものがある。

以下、興味深い資料をいくつか列挙する。

(1) 19世紀後期の教本類

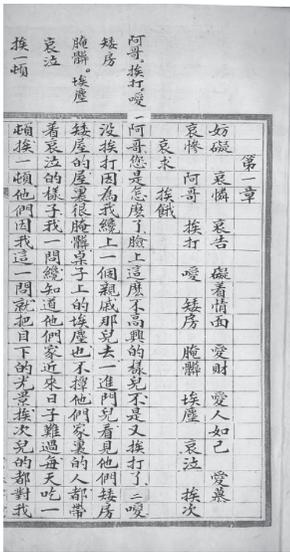


図1 『北京官話全編』

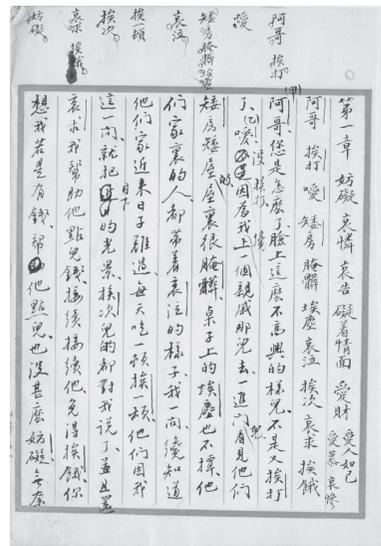


図2 『北京官話全編稿本』

2) この『華語月刊』は東亜同文書院で教授を務めた熊野正平氏の旧蔵書である。ほぼ揃いであるが20冊ばかりは他の古書店に分割して入り散逸した。

深澤暹著『北京官話全編』6冊3巻378章

深澤暹著『北京官話全編稿本』7冊3巻378章

深澤暹著『北京官話全編總譯』9冊3巻378章

深澤暹（1876-1944）が執筆したと考えられる北京官話の会話書の未公刊本。清書されたものと稿本、翻訳本からなる。深澤暹は1896年から1898年に北京に留学した後、1898年から1928年まで中国の各地で領事を務めている。書籍の内容から清末の北京官話を映したものであると考えられる。また深澤のものとしては『元朝歴史物語』など未公刊の翻訳原稿が寄贈書の中に含まれる。鱒澤氏によると購入できた深澤氏の資料は『北京官話全編』と『歴史物語』シリーズの翻訳原稿のみであるが、これ以外のものについては國學院大學に収蔵され、『深澤暹関係文書目録』（國學院大學日本文化研究所編集）としてまとめられている。

『官話指南』関連書籍についても所蔵が多い。特に九江書會から刊行された『官話指南』は、これまで神戸市外国語大学にある太田辰夫氏の旧蔵書にあるものだけと考えられてきたが、ここに新たに1冊あることが判明した。また1902年の上海商務印書館から刊行された『官話指南』も所蔵先が非常に少なく希少である。以下に寄贈書に含まれていた『官話指南』関連本を列挙する。

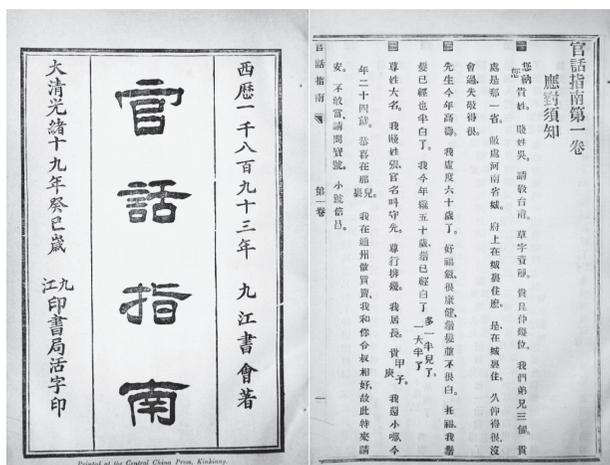


図3 九江書會『官話指南』

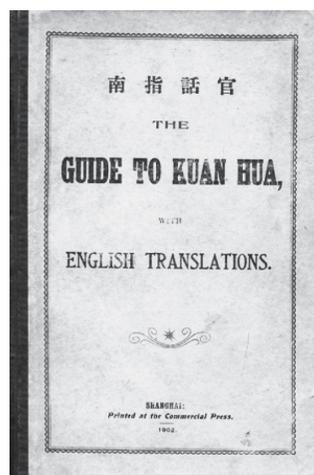


図4 上海商務印書館『官話指南』

1893年九江書會編『官話指南』

刊行年不明『官話指南』（『教本類集成』に掲載されている『官話指南』と同じもの）

- 1900年上海美華書館重印『官話指南』
 1902年上海商務印書館『官話指南 *The Guide to kuan hua, with English Translations*』
 1907年 Kelly&Walsh『官話指南 *The Guide to Kuan Hua*』
 1905年 Impromerie de la Mission Catholique『官話指南 *Boussole du Language Mandarin*』
 1923年文求堂『改訂官話指南』
 1925年大阪屋號書店『譯註、聲音重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇』

さらに『官話指南』関連としては、東方文化會主幹の飯河道雄が刊行した『支那語速成講座』をまとめた『支那語講座合本』正・続（1930年、大連・東方文化會）という書が本蔵書に含まれている。この書は『官話急就篇』、『官話指南』、『官話談論新篇』に詳細な語釈と訳を加えている。

(2) 書き込み資料

鱒澤氏が収集した書籍の中には当時の学習者による書き込みがある資料が数多くある。その中で代表的な2点を紹介する。1点目は廣部精による『亜細亞言語集』初版（2巻、4巻、5巻）である。『亜細亞言語集』は『語言自邇集』の元となった『問答篇』の流れを汲む会話書であるが1892年の再刷版が数多く流布している一方、1880年に刊行された7冊組の初版を所蔵している機関は非常に少ない。書籍を見ると筆跡が異なる複数名によると思われる書き込みがなされている。この書き込みにはいくつかの種類があり、たとえば図5には「明治馬年六月七日於東京外国語校念完了」といった書き込みが、図6のような『語言自邇集』と比較して書き込まれたと思われるものがある。下の図に見られる「金森」は速水一孔であり、この本の、元来の持ち主こそ、「田盛大」すなわち、小田切万寿之助であり、絵は速水一孔による筆、書き入れは小田切万寿之助³⁾によるものである、こういった情報からこの書は興亜会支那語学校、東京外語で使用したもの、また外語では、ウェード本を使用していたので、小田切が、外語で訂正したものであることが分かっている。

3) 1886年に外務省に入省し、その後中国の領事を歴任。

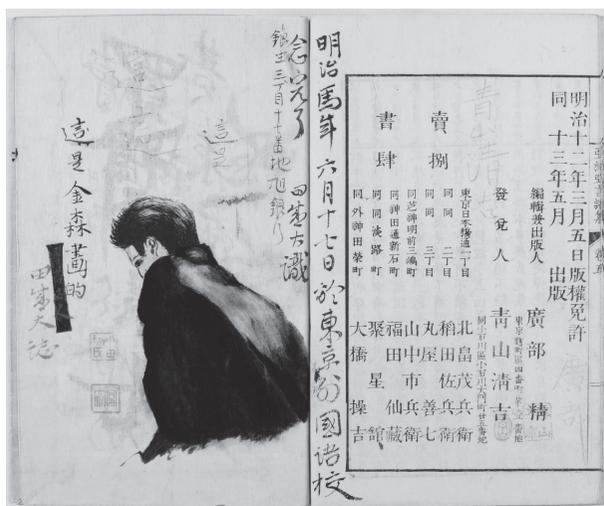


図5 『亞細亞言語集』の書入れ①



図6 『亞細亞言語集』の書入れ②

2点目は2冊所蔵されている『文件自邇集』である。1冊はThomas Francis Wadeが1867年に刊行した『文件自邇集 *Wen-Chien Tzū-erh Chi, a Series of Papers Selected as Specimens of Documentary Chinese*』である。これとは別にもう一冊、刊行も著者も記載されていない写本『文件自邇集自卷一至卷十』がある。これはおそらくはWade版の『文件自邇集』から写されたものであると思われるが、朱による書入れが非常に多く、Wade版の『文件自邇集』と同じところもあれば異なるところもある。

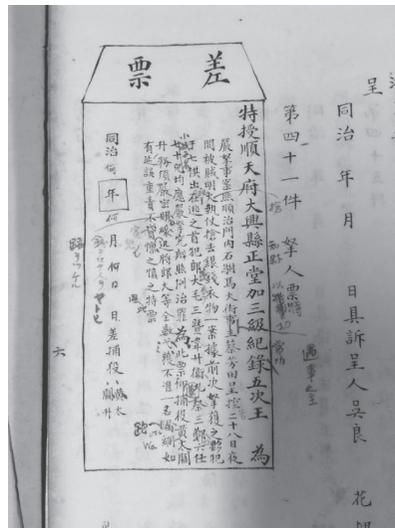
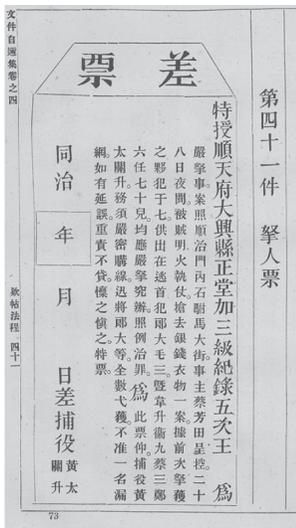
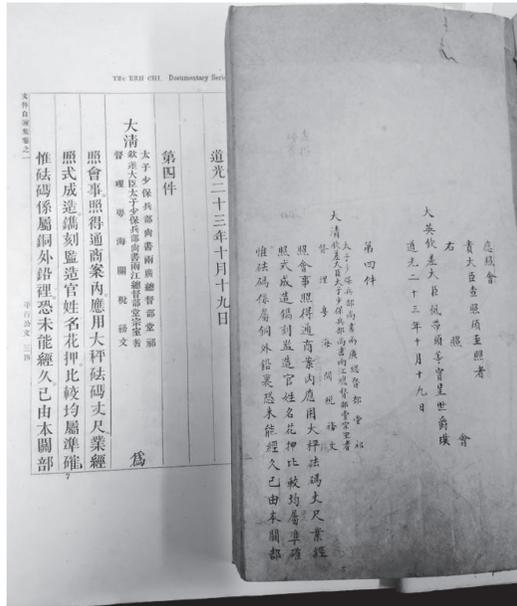


図7 左：Wade版『文件自邇集』右：「写本『文件自邇集自卷一至卷十』」

(3) 大正・昭和期の中国語教本

『中日對譯詳註中等日本語讀本』（飯河道雄譯註,1931）、『支那語正音發微』（伊澤修二,1915）、『和文華譯講義』（中谷鹿二,1926）など大正から昭和初期にかけて日本国内や大連などで刊行された多くの中国語教本ある。この時代の中国語教本は教科書としての価値だけではなく、当時

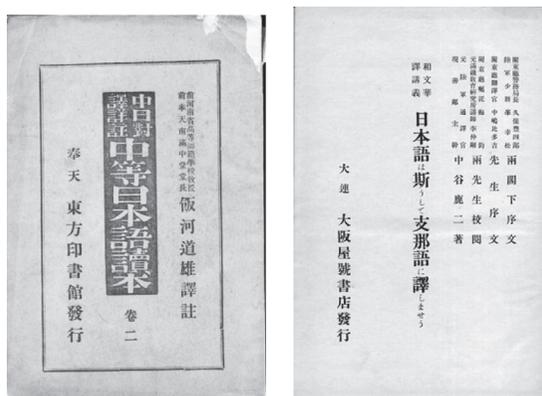


図8 大連で刊行された教本類

中国で使われていた中国語を研究する上で貴重な研究資料となる。書籍だけではなく傳芸子氏が吹き込んだレコード盤などもあり、1940年代の北京語の音声を聞くことができる。

(4) 辞書の原稿

詳細は不明であるが、民国期に執筆されたと考えられる『華日経済用語辞典』と名付けられた原稿が700枚程度ある。前書きから遠藤章三郎氏と魚返善雄氏の指導を仰いで、民国期に完成したものであるようだが。執筆した本人の名前の記載がなく、また当時刊行された辞書にもまだ該当する辞書を見つけれられていないため正確な情報は分からないが、かなり詳細な語釈がつ

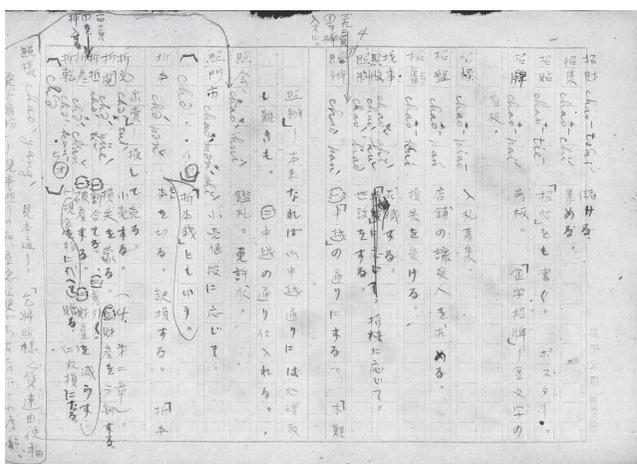


図9 『華日経済用語辞典』

いており、当時の中国語を知る上では一つの資料となると考えられる。

(5) 新聞広告の翻訳原稿

当時中国で刊行されていた新聞に掲載する日本の広告の翻訳原稿が大量に所蔵されている。いずれも日本人が中国語に翻訳したものと考えられるが、別の筆跡による朱筆で書き直されている箇所もあり、翻訳の修正過程を見ることができる。まとまった量があるため、当時の広告や翻訳に関する研究に役立つものと考えられる。

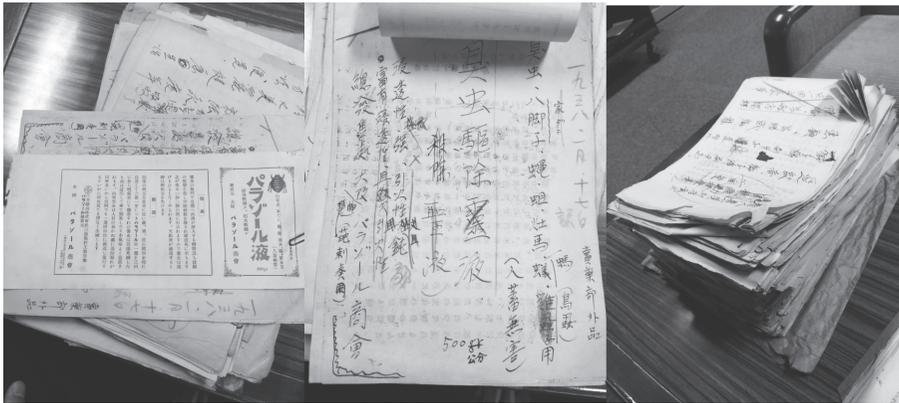


図9 広告の翻訳原稿

(6) 写真類

学校の卒業アルバムから個人アルバム、絵葉書など10種類以上ある。その中には1920年代の中国を写したのものや、絵葉書に詳細なメモをして一緒に保存しているものまであり当時の中国の様子を知ることができる。

またアルバム類では東亜同文卒、三井書院卒の杉本氏という人のアルバムがあり、三井書院で撮影された写真には当時三井書院の校長を務めた呉泰壽と考えられる人物の写真が掲載されている。呉泰壽は『官話指南』の編著者である呉啓太と鄭永邦のいところで、日本語訳である『官話指南總譯』を出版した人物であり、彼の写真はこの個人アルバムに掲載されているものが現在確認されている唯一のものである。アルバム類ではそれ以



図10 1920年代の万里の長城

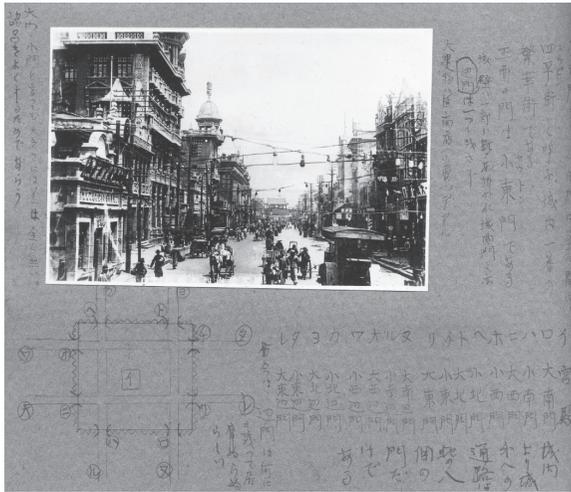


図11 吉林の絵葉書とメモ



図12 吳泰壽

外にも東京外国語大学、東亜同文書院、東洋植民学校、青島憲兵隊のアルバムなど学校関係のアルバムなどが所蔵されており、ここには当時中国語教育に携わった人物の写真が収められている。

また『臺北師範學校創立30周年記念寫真帖』（大正15年）は、伝本は少なく、台湾国語学校の関係者、全卒業者写真と名前がある点は、極めて貴重で、日本語教育の原点を知ることができる日本語教育史研究者垂涎の資料であると寄贈者の鱒澤氏は述べている。

(7) 稀少な写本と石印本

唐話関連資料として『唐話纂要』、『南山俗語考』、『譯家必備』、『漢語跬歩』などがある（一部は写本）ほか、『華語跬歩』の稿本で、かつて六角氏の蔵書であった崎陽揮肅先生著『華語跬歩』（瓊浦揮肅未定稿 明治丙戌夏月 上下2冊）や音韻関係の資料として『燕音集』（石印本）と『華語跬歩音集』（石印本）、『中國話全五十章』（写本）など貴重なものがある。

語教育』(1992、不二出版)を著した那須清氏から鱒澤氏に恵贈されたもので、特に検定試験関係は、古書市場に出たことが無く稀少な資料と言える。

(9) 川崎近義の墓誌銘の原拓

寄贈資料の中には近代中国語教育のパイオニアである川崎近義の墓誌銘の原拓がある。この墓誌銘は鱒澤氏が再発見し、公開したものである。川崎近義についてはそれまでは『北京官話文法』に記載されている短い記載以外その人物について詳しく知られることが無かった⁴⁾が、この発見により川崎近義という人物について詳しく知られるようになった。なおこの墓誌銘の全文については1988年10月に刊行された「北京官話教育と『語言自述集散語問答明治10年3月川崎近義氏鈔本』」(鱒澤彰夫『中国語学』235号、152頁)に掲載されている。

4 おわりに

以上が目録編纂作業により判明した鱒澤氏寄贈書の概要である。なお目録編集作業は今後も継続し、2016年3月までには完成、印刷する予定で進めている。完成した目録は目録は印刷物以外にCSACのサイトを通じて公開し、貴著書については順次デジタル化しCSAC Digital Archivesを通じて公開する予定である。

謝辞：なお本稿の執筆に当たっては鱒澤彰夫氏より直接貴重な意見を伺った。

4) 鱒澤氏の考察では何盛三はこの碑文の文言に依り著述したとしている。ただし、『北京官話文法』では出典は未載であった。何盛三は、善隣書院出身であり、宮島大八など、碑文裏面に記載されている協賛者はまだ存名のものもいたけれど、長崎の穎川重寛碑のように有名ではなく、碑を知る人は少なかったのではないかと考えている。